

「山の音」におけるハスの新聞記事について

管 虹

要 旨

《山之音》は川端康成戦後の第一部長篇小説、从各个角度论及此作品的先行研究达百余篇。论及本题の有四篇、或许因视角不同、此四篇均未深入到细部进行论证。本文着眼于作品中有关千年荷花の新闻报道の引用、由此发现了与作者、主人公、主题密切相关の很多重大问题。

有关千年荷花の新闻报道、本文作者对《朝日新闻》进行了深入的调查、发现川端所引用の新闻报道与实际の新闻报道有着微妙の差别、尤其是川端将千年莲子发现の地点改写为“满洲”、这与战争中川端の切身体验乃至战后川端の思想变化有着密切の关系。进而本文作者从川端の随笔中发现了战争中他曾两次出访“满洲”、并对“满洲”有着深切の感情。这一事实与川端对战争の反思或许是他改写新闻报道の缘由吧。

另外本文作者还发现新闻报道の两次插入时间与女主人公の妊娠时间恰巧吻合、川端正是巧妙地利用了荷花这一植物象征、来暗喻历尽战火の洗礼、女主人公生存与再生意识の复苏。

キーワード……川端康成 山の音 ハス 新聞記事 满洲

はじめに

「山の音」は川端康成の代表作の一つである。起稿から完成まで五年間を閲して、17回にわたって、いろいろな雑誌に連載の形で発表された¹⁾。初版は筑摩書房から、昭和29年4月20日に刊行された。

従来の「山の音」研究では、個人・社会、家庭・国家、時間・空間、老・性、美・悲などいろいろな角度から考察されてきた。その中でも私が注目するのは、作中の植物のイメージに触れた論である。なぜならば、植物のイメージは主人公のイメージ及び作品のテーマとの関連が深いのではないと思われるからである。例えば、山本健吉は作中の盆栽の「もみじ」に注目し、源氏物語との関連について指摘し²⁾、さらに谷口幸代は山本の論に触れながら、菊のイメージの持つ役割の重要性に論及した³⁾。

盆栽の「もみじ」も「菊」も、なるほど「山の音」では重要な役割を果たしており、二氏の指摘にもそれなりの意義があるが、私としてはこうした作中の植物に言及した考察の中でも、

「山の音」におけるハスの新聞記事について（管）

より注目すべき論として越智治雄「『山の音』その一面」⁴⁾を挙げることができる。氏は「大賀蓮の開花の挿話が『鳥の家』『蛇の卵』に綴られているが、これは昭和27年の事実であって、当然それにまつわる主人公信吾の想念には川端自身の感想、その時点での感想が託されていると見てよいだろう。」と説く。つまり越智の言わんとするのは、川端の戦後の時間が重層して定着されていることと、モチーフとの関連　ハスに触発された信吾の想念が、菊子の内部に宿っていた一つの生命にかけている思いに連続していたことが明瞭であろうと、いうことである。

越智の考察それ自体には、特別大きな難点があると思われないが、やや思いつきの範囲を出ていない。しかしながら、作中のハスに託されている意義は、越智が大雑把に指摘していることだけにはとどまらないのではないかと私は思う。なぜなら、「山の音」には二度もハスが話題になっている場面が描かれているからであり、さらにはこのハスの場面は、実際に当時の新聞記事を紹介するという形で描かれているのだが、私が調査してきた結果、作中で紹介されている記事の内容と事実としての新聞記事との間に微妙なズレが認められたからである。こうした重要な問題については、越智の論考の中では全く触れていないのである。

私としては、この越智のハスに対するこだわりにも注目した。が、越智の掘り下げは不十分である。本稿では、そこからもう一步踏み込んで、作品の後半部に作られた新聞記事から生まれたハスのイメージについて考察したい。それは全作品の中で見ると、格別重要な存在ではないが、作者はなぜ2回もハスに関するストーリーを挿入したのだろうか。また当時の新聞記事を調査してみると、引用された新聞記事と本当の記事と微妙に違っている。そこで私としては、まず実際の新聞報道におけるハスに関する記事と「山の音」の中におけるハスに関する新聞記事との異同について確認し、両者のズレがどのようなものであるか、さらにはそのズレの意味するところがなにであるかについて考察を試みた。

1 ハスについての新聞記事

先ず、「山の音」ではどのようなストーリーの中に、どのようなハスの記事が作られたのかを明らかにしておきたい。

尾形信吾は妻保子と息子修一夫婦と共に鎌倉に住んでいる。家庭内では修一が心に受けた戦争の傷を引きずったまま戦争未亡人の絹子に溺れてしまった。一方信吾の心に未だ忘れ得ぬ保子の姉への憧れが潜められており、その思いは次第に菊子へと重ねられていく。やがてある秋の日、信吾は家族が揃った食卓で故郷信州の紅葉を見に行こうと提案する。作中にハスに関する記述が認められるのは、二箇所であるが、一箇所は、信吾の息子修一が菊子と結婚して、間もなく女をこしらえ、この間に妊娠した菊子が中絶してしまうという場面においてである。菊子が人工流産した翌日、「花開く二千年前に蓮」という珍しい新聞記事があった。信吾はハスの記事を書いていた新聞を持って菊子の部屋へ行く。

そのハスについての新聞記事は以下のように書かれている。

信吾は保子が見てみたらしい四、五日分の新聞を拾ひ上げて、読むともなしに見てみると、「花開く二千年前の蓮」といふ珍しい記事があつた。

昨年の春、千葉市検見川の弥生式古代遺跡の丸木船のなかから、三粒の蓮の実が発見された。おほよそ二千年前の実と推定される。なにがしといふ蓮博士が、それを発芽させて、今年の四月、その苗を、千葉農事試験場と千葉公園の池と千葉市畑町の作り酒屋の家と、三カ所に植えた。作り酒屋は遺跡の発掘に協力した人らしい。釜に水を張つて植え、庭先においた。その作り酒屋の蓮が、一番に花を開いた。蓮の博士はしらせて駆けつけて来て、「咲いた、咲いた。」と美しい花をなでた。花は「徳利型」から「湯飲型」、「お鉢型」となり、「お盆栽」に開き切つて散ると、新聞は書いてみた。花びらは二十四枚とも書いてみた。

眼鏡をかけた、白毛まじりらしい博士が、開きかけた蓮の花茎に手を持ちそへてゐる写真も、記事の下に出てみた。読み直すと、博士の年は六十九だつた。

信吾はしばらく蓮華の写真を見つめてみたから、その新聞を持つて、菊子の居間へ行つた。

……

「二千年前の蓮の実が、花を咲かせたといふの、新聞で見たか。」

「はい、見ました。」⁵⁾

ただストーリーから見れば、舅と嫁の関係の設定に、勝手に嫁の部屋へいけないので、珍しい記事の載る新聞紙を持って見せるのは病気見舞いのきっかけにしたようである。しかし、それは一読する限りでは、何の変哲もない嫁と舅との日常会話の一筋としか見受けられない場面であるが、この場面を「山の音」の全体の構成の中での役割という角度から検討すると、重要な意味が暗示されていると考えられてならないのである。さらに、このハスの新聞記事がしばらく後もう一度、同じく嫁・舅間で話題にされるとなると、これは決して軽視することはできないであろう。

そして、信吾は悲しみの中に浸っている菊子に「二千年前の蓮の実が、花を咲かせた」と言った後、また「修一は菊子の潔癖と言つたがね」と言ったら、「菊子の目に涙が浮かぶ。」という簡単な会話の場面が設定された。

しばらく経つと、またハスの記事が出た。2回目の記事が出たのは菊子がまた妊娠しているらしい時と修一の女絹子が妊娠していることがはっきり分かっている時である。

2回目のハスについての新聞記事が紹介された時も、やはり菊子が妊娠しているらしいということが暗示され、さらに今度は修一の愛人も妊娠しているという状況下においてであることが読者に示される。修一の妻と愛人とのいずれも妊娠しているという時期に2回目のハスの話題を出しているという点も注目にあたいます。かつて「山の音」を論じた先行研究では、全く

「山の音」におけるハスの新聞記事について（管）

この点についての考察はなされていない。以下、少し長くなるが、2 回目の新聞記事をめぐっての嫁・舅の会話場面を引用する。

「お父さま、二千年前の蓮の記事が、二つも出てゐますわ。お読みにになりましたの？ 別にしておきました。」と言ひながら、二日分の新聞をちやぶ台にのせた。

「ああ、読んだやうだね。」

しかし、信吾はもう一度手にとつてみた。

弥生式の古代遺跡から、おおよそ二千年前の蓮の実が発見された。蓮の博士が芽を出させた。花が咲いたと、前に新聞に出てゐた。信吾はその新聞を菊子の部屋へ持つて行つて見せた。菊子は病院で流産をしてきたばかりで、寝てゐる時だつた。

その後二度、蓮の記事が出たわけだ。その一つは、蓮博士がその蓮の根を分けて母校の東京大学の「三四郎」の池に植えたといふ。もう一つの記事はアメリカの話で、東北大学のなにがし博士が、満州の泥炭層から、化石のやうになつた蓮の実を発見して、アメリカに送つた。ワシントンの国立公園では、その実の硬変した外側をはがすと、しめした脱脂綿に包んで、ガラスのなかに入れておいた。去年、愛らしい芽をふいた。

今年は池に移し植えられて、つぼみを二つつけ、薄紅の花を開いた。公園科は千年乃至五万年前の種だと公表した。

「前に読んだ時も、さう思つたが、千年乃至五万年とほんたうに言つたのなら、ずいぶん大幅な計算だね。」と信吾は笑ひながら、なおよく読むと、日本の博士は種の発見された、満州の地層の工合から、数万年前のものと想像してゐたさうだが、アメリカでは、種の外側の削り落としたのを、炭素十四の放射能で調べて、おおよそ千年前のものと推測されたといふ。……」⁶⁾

二千年のハスの実が花を開いたというのは、当時の新聞記事が引用されたという形で記されている。そこで、先ずこの記述が、実際の新聞記事にもとづくものかどうかについて調べてみた。しかし、そのまま引用されたようでもない。

「山の音」1 回目が発表されたのは昭和24年9月であり、最終回は昭和29年4月であつた。この間の『朝日新聞』によると、ハスについての新聞記事は8回掲載された。

表 1

	第 1 回	第 2 回	第 3 回	第 4 回
時間	昭和 25・7・9	昭和 26・5・10	昭和 26・12・12	昭和 27・7・8
題	千年ぶり？芽を出す		東・西ハス博士対面	二十日ごろ開花
副題	大賀博士 植物学会 に話題		丸木船の鑑定を依頼 大賀博士、チェ教授に	“二千年前のハス”に つぼみ
概要	千数百年前のものと推定されるハスの実が“ハス博士”大賀一郎理博(68)の手で芽を出した。大賀を紹介：大正十三年満州の泥炭層から発掘した五百年以上昔のハスの実の花を咲かせた。学位論文で博士はハスの実は摂氏十度以下の地中なら二千五百年以上生きられると予想していた。	大賀博士(69)から与えられた一粒ずつを水温二十八度前後のガラス箱に入れ、カメラでにらんでいたが両方とも二日目の九日早朝めでたく発芽。大賀が発掘した丸木舟についていた三粒のうちの二つだ。	大賀は来日のシカゴ大のR・W・チェニ教授を訪問。検見川で発掘した二千年前のものと推定される丸木舟の破片の年代鑑定を依頼。同教授は昨年東北大から持ち帰った一粒のハスの実を萌芽させることに成功した。その実は五万年前のもので、大賀が大正五、六年頃満州で発掘、東北大に寄贈したものだ。	二千年前のハスの実がみごととなす紅色のつぼみを持った。大賀博士は七日、このハスの実を育てた伊原茂さんを訪れてつぼみを検分、「二十日ごろには赤い花が開く」と折り紙をつけた。

	第 5 回	第 6 回	第 7 回	第 8 回
時間	昭和 27・7・18	昭和 28・6・3	昭和 28・7・18	昭和 29・2・23
題	二千年前のハス け さ、ほころぶ	二千年前のハスに折 紙	ハスの化石発見	ハンブルグから名誉 賞
副題		大賀博士発掘の実 シカゴ大学の測定で	福井で 白亜紀の葉 二枚	ハス研究の大賀博士 に
概要	二千年前のハスの実は十八日午前四時千葉市畑町伊原茂さん方で十一・一センチに成長したつぼみの先端がほころびはじめたが、寒さのためにまたしぼんだ。大賀博士は自宅からかけた。	ハスの年代を正確に知るために、大賀博士の依頼で、シカゴ大のチェニ教授の報告が届いた。ラジオ・カーボンの結果は丸木舟は三千年前のものと分かった。	金沢大学講師松尾秀邦氏は去る十二日、福井県今立郡池田村字皿尾の山地で、(白亜紀に属する)直径約十二センチのハスの葉二枚を発見した。白亜紀のものは日本で発見されたのは最古のものという。	ドイツのハンブルグ市から同市名誉賞が届いた。昨年、同市の国際園芸博覧会に大賀博士が出品した約二千年前のハスがみごとに花を開き、人気の的となったその功績をたたえたもの。

「山の音」におけるハスの新聞記事について（管）

表1に示したように、ハスについての記事は8回出た。作者はどれを参考にして書いたのか、本当の記事と作った記事との相違点はどこにあるのかを、明白にするために、なお『朝日新聞』以外の新聞についても調べてみたが、他紙ではハスの記事についてさほど詳しく報道していないので、川端が参照したのは『朝日新聞』であったと想定される。

『朝日新聞』でのハスに関する記事の概要は表1の通りであるが、これらを「山の音」の2回のハスをめぐる嫁・舅のやり取りと比較してみると、両者の間には微妙な差異が認められる。以下、両者の異同について簡単に表示してみた。ただし、8回目の記事は時間から見れば、発表当時は新聞記事がまだ出されていないので、分析のデータとされないことにした。また、1回目の作った記事は「鳥の家」に綴られている。「鳥の家」の発表時間は昭和27年10月である。時間から見れば、作者が6回目と7回目を参考する可能性がないので、表2は6回目と7回目の記事は調査の対象とされていない。

表2「山の音」1回目のハスの記事と新聞記事との異同

ハスの実	テキスト	新聞記事との共通点	新聞記事との相違点
発見の年月	去年(?)の春	4回(26年3月)	1回(19年)
年代測定	二千年前	2・3・4・5回	1回(千数百年前)
ハスの生長	今年(?)の春頃	1回(25年6月1日発芽) 2回(26年5月9日発芽)	4回(27年7月20日花開く)、5回 (27年7月18日開花)
発見者	なにがし博士、69歳	(大賀)2・5回69歳	(大賀)1・3回68歳、4回72歳
発見場所	千葉県検見川の弥生式古 代遺跡の丸木船	1・2・3・4・5 千葉県検見川丸木船	

表2を総合分析し、また作品の発表時間と合わせてみれば、川端が1・2・3・4・5回の記事を全部、あるいはその中のいくつかを参考して、1回目の記事を作ったことが考えられるだろう。小説に書く場合は、新聞記事と違って、人の本当の名前を出さないのは一般的のようである。作った記事はハスの発見人の名前を明確に書いていないが、ほかのデータを分析すれば、大賀一郎のことを指していることがはっきりするだろう。また年齢は多少違いがあっても、満であるか数え年であるかの区別があるし、記事が出された年も違うので、その点はいした相違点ではないと思われる。だから、1回目の作った記事と本当の記事との共通点が多かったことに特徴づけられよう。

表3 「山の音」2回目のハスの記事と新聞記事との異同

	テキスト	新聞記事との相同点	新聞記事との相違点
発見人	東北大学のなにがし博士		6回(大賀) 7回(松尾秀邦)
発見場所	満州の泥炭層		6回(千葉)7回(福井)
移動場所	アメリカ(ワシントン・国立公園)		6回(アメリカ・シカゴ大学)
ハスの実の存在時間	千年乃至五万年 (アメリカで調べた結果千年前)		7回(白亜紀)
その他	場所:アメリカ 手段:炭素十四の放射能で調べた。 結果:およそ千年前のものと推測される。	(6回)場所:アメリカ・シカゴ大学	(6回)測定手段: ラジオ・カーボン・テスト 結果:三千年前

表3では、テキストで2回目に作った記事と新聞記事との相違点が多かった点に注目したい。テキストの2回目の記事は昭和28年10月に発表された「蛇の卵」に綴られている。発表時間から見れば、6回目(28年6月)と7回目(28年7月)の新聞記事を参考にして書いた可能性が高いようである。しかし、テキストではハス発見人は東北大学のなにがし教授と記述し、新聞記事のハス発見人は東大出身の大賀(6回)ではないし、金沢大の松尾秀邦講師(7回)でもないようである。特にここでは、注目すべきは作った記事はハスの発見場所が、本当の発見場所 千葉県の見川(6回)ではないし、福井(7回)でもない。「満洲」の泥炭層と書き換えてしまったのである。発見場所は「満洲」の泥炭層というのは3回目の記事と6回目の記事に出たが、それはいずれもハスと関連のある昔の話であり、新しい話に出たハスの発見場所ではない。引用であるならば、地名の場合は忠実に引用すればいいのにというような気がする。どうしてハスの実が発見された場所は新聞と違って、わざと「満洲」と置き換えてしまったのか、私が思うに、川端康成は「満洲」となにか特別のかかわりでもあるのではないか。川端はどうして「満洲」の泥炭層から出たハスの実でなければならないのか。いったいどういうハスのイメージを作りたいのかなどの疑問が生じてくる。

2 川端康成と「満洲」

先ず、前述で示した論のうち、私が注目したのは『朝日新聞』の記載と違うにもかかわらず、「山の音」では、新聞記事として、ハスの発見場所が「満洲」となっている点に関してである。なぜハスの発見場所は「満洲」と書き換えてしまったのかということの解明するために、先ず、川端康成にとっては、「満洲」はどのような存在であるかを明らかにしたいと思う。

去年の春と秋も、満洲で過ごした。春は一月半ほどの、そして秋は三月ばかりの旅であった。二度とも北京へまはつた。内地でも旅がちの私のことで、去年は、自宅にゐたよりも満洲にゐた日数の方が多かつた。しかし、私は満洲のことをまだなにも書いてゐない。あわただしい旅行者の見聞記ではなく、いつれこの国にしばらくとどまつて、この国を書きたいといふのが、満洲国に対する私の尊敬でもあり、愛情でもあつた。⁷⁾

川端康成は第二次世界大戦の後期、つまり1941年4月と9月、二度「満洲」へ行っている。

1941年4月2日神戸から出港して、4日新京（長春）についた。今度の旅は七段棋士呉清源、福田五段審判による全満田碁大会観戦文士として、満洲日日新聞社は川端と作家村松梢風を招いた。吉林、奉天（沈陽）、ハルピンなどをまわってきた。長春では「満洲」作家北村謙次郎、山田清三郎、檀一雄、田中総一郎、緑川貢らに会った。その後、熱河、承德、天津、北京、大連を経由して5月16日神戸港についた。一ヶ月半ぐらいの「満洲」の旅であった。

2回目は関東軍の招きで、9月6日にまた神戸港から出発、10日に大連についた。今度は火野葦平、大宅壮一、高田保、山本実彦らと一緒に、短時日の間に大連、鞍山、奉天、新京、吉林、ハルピン、黒河、チチハルと全「満洲」を駆け巡るスケジュールであった。スケジュール通りにまわってから、よりよく「満洲」を知るために、自費で滞在を長く伸ばした。妻を呼んできて、中国の華北への旅に出た。10月北京へ行って、小島政二郎、片岡鉄兵、佐々木茂索に会って、更に張家口へ行って、帰りに旅順によって、大連から帰国し、11月30日神戸についた⁸⁾。

川端は「満洲」をどのようにとらえていたのだろうか。「満洲」からの帰りの船で、川端は当時、ジャーナリストとして現地で活躍した筒井俊一宛てに手紙を書いていた。

体が楽なので、甘美な物思いもありますが、それは内地へ帰る喜びよりも満洲を去つて行く悲しみです。全く自分でも不思議なくらいで、この船でそのまま引き返したいのです。...大連旅順ハルピンなどに早く住むことにしたいと存じます。.....⁹⁾

二年後も、川端は当時の自分の「満洲」への思念を思い出した時、さらにこう語った。

殊に私は郷愁のさらにはない自分が疑問に思へ、大連で神戸行の船に乗る時に初めての郷愁は、出港の音楽に誘われたに過ぎなくて、それもこれから帰るのではなくこれからどこかへ旅立つのであるかのやうなをかしい錯覚で、郷愁といふよりも旅愁であつたのには、なにか危険を感じた。¹⁰⁾

「満洲」から日本へ帰るのだが、その時の川端は故郷へ帰る喜びを感じるのではなく、「旅愁」を感じた。特に「これから帰るのではなくこれからどこかへ旅立つのであるかのやうなをかしい錯覚」という言葉に注目したい。この錯覚はおそらく「満洲」と日本の位相の顛末から生じた錯覚なのではないか。そういう意味からすると、「満洲」は川端にとってはノスタルジ的な存在であったようである。このような「満洲」のために川端には何かやりたい気持ちが溢れていたようである。それは前出の筒井俊一宛の手紙より伺える。

自分の創作の外にも、いろいろ私に出来る仕事もありそうな気がしました。しかし、宮仕へらしいものは今更致しません。満洲国へ行つてもやはり一流浪人に過ぎないでせう。

あの年鑑は私の考へでは内地の本屋を主にせられた方、在満作家のために、いまのところはよいと考へます。編輯はおいそぎ願ひたく、三人の委員にも御督促下さい。只管(この二字明らかならず)在満作家の世話は出来るだけ致します。小生はどの出版社にも本屋にもつながりがありますから、さういふ点は便利です。……

「あの年鑑」とは「満洲」各民族の小説を毎年、「年鑑」に収録して出すように内地の出版社に斡旋しよう、というのであった。又「三人の委員」とあるのは「満洲」側の委員としてあげた古丁、山田清三郎、北村謙次郎の三人である。短かった一ヶ月ぐらいの滞在であったが、帰る前に出版社は創元社に決まり、収録されるのは、日満二十数作家の作品も決まり、更にこの種の「満洲」各民族代表作品集は、これを第一期として、年々刊行するなどの具体的なことはもう決まったようである。

以上のことからみると、川端はいかに「満洲」に愛着を示し、積極的に「満洲」文学に力を注いだかが窺えるであろう。内地で本を出版することについても川端は自らその詳細を記した¹¹⁾。

それによると、1回目の満洲訪問は、昭和16年4月のことであった。満洲日日新聞の記者筒井俊一や満洲新聞の緑川貢らに案内されて、馬車で寛城子という町へ行った。山田清三郎や北村謙次郎もいっしょに乗っていたようである。寛城子についたら「ポポフ」というロシア喫茶店で『満洲国各民族創作選集』を出版する話がまとまったようである。

周知の通り、川端の斡旋によって、『満洲各民族作品選集』(第1集、第2集)を出版したば

「山の音」におけるハスの新聞記事について(管)

かりではなく、創元社から『満洲国青少年生活記』(満洲の私達)も出版され、新潮社から『春聯』(北村謙次郎作)も出版された。

随筆「新京から北京へ」¹²⁾や「哈爾濱記」¹³⁾の中にハルビンで作家林芙美子、窪川稲子、横山隆一やロシア人作家パイコフらとの面会や、新京で国民学校や吉林ダムを見学したこと、北京で全市の小学校の日本語学芸大会や北京市中小学校春季運動大会に出席したり、熱河省の承德女学校を見学したりしたこと、など滞在中の活動や見聞などを記した。

私は満洲紀行を紙面には書かなかつただが、内心には書きつけてみたやうに思ふ。つまり、満洲から北支への旅行の後、二年間ほど仕事がしにくくて困難した。この旅行に心の振動が強過ぎる時期だつたらうと思ふ。¹⁴⁾

「二年ほど仕事がしにくくて困難した」あげく、戦後最初に作られた長編がこの「山の音」である。川端は内心には何を書きつけていたか分からないが、とにかく「山の音」に本当の新聞記事と違った記事を作った。つまり「満洲」をずばり作中に書き入れた。ほかのところではなく、「満洲」の泥炭層に発見されたハスのイメージを作りたがっていたに違いない。だから、本当の新聞記事と川端の作った新聞記事との「ズレ」は川端の戦時の特別体験、すなわち「満洲」との特別なかわりから生じてきたと言えよう。

以上より、川端が「満洲」にどのような思いを抱いていたかが判明しただろう。それでは、ハスの記述と「満洲」とはどのようにつながっているのだろうか。次章でこの問題について詳述したい。

3 ハスの由来と川端康成への影響

植物 花や木や草などは文芸作品にいろいろな役割を果たしている。特に川端の場合は、自分の作品にたくさんの作物を編みいれて、独自の植物イメージを作っている。例えば、掌小説「月下美人」¹⁵⁾では、ずばり一夜で萎む月下美人の儂い美しさは、この世の絡まりの手前にいる未婚の女性すみ子の若い官能美に譬えているようである。また、戦後間もなく発表された短編「生命の樹」¹⁶⁾が想起される。その中で川端は、やはり植物のイメージを借りて、主人公の運命を暗示している。主人公の啓子は恋人であった特攻隊の植木の後を追って死のうという気持ちを持っているが、寺村の存在によって生きつづけているのではないかという終わり方をしている。それは焼け跡の樹木を見て、聖句を思い出す。つまり、焼けた木に吹いている芽に象徴され、ヨハネの聖句が暗示し、「私たちは帰る」という「たち」という複数に示されていると指摘される¹⁷⁾。このように川端の作品に植物のイメージは数多く出てくる。ただし、この『山の音』の中に、なぜハスという植物でなければならないのか。それは、やはりハスとい

う植物は他の植物が持っていないイメージを持っているからである。特に川端にとっては「満洲ハス」というイメージを作るには、ハスは一番相応しい植物のようであるからである。だから、ここでは、ハスの出典とハスの意味象徴、及び川端への影響について考察してみたい。

ハスは「中国から導入され¹⁸⁾」また「日本には古くから大陸から渡来したらしく¹⁹⁾」と書いてあるので、川端が作ったハス 蓮華 のイメージは恐らく中国古典及び仏教文化と深い関連があるようである。

中国では、周代の『詩経』に蓮華の名が見え²⁰⁾、司馬遷『史記』、賈思勰『齊民要術』、徐光啓『農政全書』、李時珍『本草綱目』などにも蓮華についての記録が数多くある。『古今圖書集成』²¹⁾には蓮華を歌う漢詩が四百首も収められている。「泥中の花」として、初出するのは『爾雅』(前2世紀)である。つまり、「茎下白弱在泥中」である。その後、散文、詩や詞の中に頻出し、屈原、白居易、李白らの詩作にも見られる。その中で一番有名なのは宋の周敦頤の「愛蓮説」である。蓮華を愛する理由は「出淤泥而不染濯清漣而不妖中通外直不蔓不枝香遠益清亭亭淨植可遠觀而不可褻翫²²⁾」ということにある。つまり、蓮華は汚泥の中に生じながらも、染らない清浄、高潔の花としてたたえられている。中国の古人は50種類の花の品格を分析し、「五十客²³⁾」だと総括した。「桃為妖客」、「梅為清客」、「蘭為幽客」などに対して、「蓮為淨客」とされている。花の中、蓮華は清浄な君子と喩えられている。蓮華を通じて人生に対する中国人の恋愛や倫理を歌い上げているのが多いようである。

汚い泥中から清純な花を咲かせるハスは、極楽浄土に見立てられ、仏教と強く結びついている。「泥中の花」というように汚い泥に染まらず清らかで美しい蓮華は、仏典では清浄な姿を仏などに喩える。仏・菩薩の座る蓮華の台を蓮台、蓮華座という。『妙法蓮華経』は「白蓮華のように優れた教えを説く経」という意で経題に用いられている。『華嚴経』では、毘盧遮那仏の世界を蓮華蔵世界と呼び、仏の住むこの世界を蓮華に喩える。阿弥陀の浄土の蓮華の中に往生することを蓮華化生といい、密教では胎蔵界曼陀羅の中心に、八弁の蓮華の葉の上に、大日如来を中央に四仏・四菩薩を回りに配したものを中大八葉院と呼び、いずれも仏の大悲を表す。煩惱の汚れがなく、純粹無垢で清浄な状態を、仏身や、悟りの世界、浄土などと象徴的な者として表現した。

仏教の発祥地インドでは、ハス女神(母神)は生産、豊饒、美の象徴である。『維摩経』に「奇なるかな火中に蓮生ず、煩惱愛欲の中に正覚を示す」と説く。

日本では古くは「はちす」と呼ばれ、『古事記』雄略天皇条にみえ²⁴⁾、『万葉集』に「蓮葉はかくこそあるもの意吉麻呂が家にあるものは芋の葉にあらし」(巻16長意吉麻呂)などとあり、常陸・出雲・肥前などの『風土記』にもみえる。平安時代になると、仏教色が強くなり、蓮台という語があるように極楽浄土に咲く花とされ、『枕草子』「草は」の段にも「蓮葉、よるづの草よりもすぐれてめでたし」と記され、『拾遺集』には「一度も南無阿弥陀仏と言ふ人の蓮の上に上がらぬはなし」(哀傷・空也)とある。御伽草子の『文正ざうし』には、文正が

蓮華の夢想により授かった二人の姫君に「蓮華」「蓮御前」という名前をつけたとある。

川端には古典・漢学の教養が深いことは言うまでもない。古典・漢学から伝わってきたハスの知識とその意味延長がよく分かると思われる。ここではハスとの直接関連のあることを取り立てて見てみよう。川端家に残された、昭和45年の台北市での講演の記録（「源氏物語と芭蕉」）がある。この講演は主に芸術についての内容であったが、全体にわたって、仏教も含めて中国文化と日本文化とのゆかりを語っている。「唐の文化を輸入しまして、それを日本風に消化して、大体十一世紀の初め頃、『源氏物語』が出て、歌の方でいいますと『古今集』がでた。・・・芭蕉に杜甫の影響が非常に多いのです。・・・『源氏物語』が白楽天の『白氏文集』、それから特に「長恨歌」の影響から書き始められた。」と語っている。ほかのほともかく、白楽天の「長恨歌」にも「芙蓉帳暖渡春宵」「芙蓉如面柳如眉」、「在天願作比翼鳥、在地願為連理枝」²⁵⁾などのような句があり、蓮華は何箇所も出た。「長恨歌」を深く研究し、『源氏物語』との比較もした川端はその中に出たハスに気が付いていなかったはずはないと考えられる。多くの文章の中に中日文化の絆を述べ、中国文化、特に古典を川端はよく研究し、理解していると思われる。だから、川端はハスの意味象徴への受容も深いものだと見られてもいいであろう。

ここでもう一つ注目すべきは、川端彼自身の作品「叙情歌」²⁶⁾に「植物の運命と人間の運命との似通ひを感じる事がすべての抒情歌の久遠の題目である」と書いてあるが、それは必ずばりこの小説のテーマである。さらにこの作品に『維摩経』の中の「火中蓮華」の話も出た。

作中の女主人公は愛する人に捨てられ、死なれたので、「維摩経の衆香の國、さまざまの香をはなつさまざまの木の下に聖者達が坐つていられました。」と空想したり、「東洋では孔子なんかはいまだ生を知らず、いづくんだ死を知らんやとあつさり片づけてしまいましたけれども、仏教の経文の前世と来生との幻想曲をたぐいなくありがたい叙情詩だ²⁷⁾」と思ったり、さらに「奇なるかな、火中に蓮華を生じ、愛欲の中に正覚を示す。あなたに捨てられ、アネモネの花の心を知りました私は、ちょうどこの言葉の通りでありましたでせうか。²⁸⁾」と、死人に語りかけたりする。

以上挙げられたことからみると、漢文学、日本古典、仏教文化に学殖豊かな川端はもともと中国から伝わってきたハスのイメージはすっかり理解ができていると考えられる。つまり、ハスは「泥中の花」としてのイメージ　汚泥の中に生じながらも、染まらない清浄、高潔の花としてたたえられている。さらに神秘的な宗教の方に一步進んでいくと、「火中の花」としてのイメージ　奇なるかな火中に蓮生ず、煩惱愛欲の中に正覚を示すと見られている。川端はただそれを研鑽しただけではなく、『維摩経』の中に出た「火中蓮華」ハスのイメージの延長意義がかって作中（「叙情歌」）にも編まれていたことが分かる。

以上より、川端がハスに拘泥した理由・動機について考察してみた。川端がハスを選んで、「満洲」ハスのイメージを作るのは、やはりハスという植物の出典とその文芸的な意味との直接なかかわりがあると考えられよう。

4 新聞記事に生じたハスのイメージ及びその意義

越智治雄「山の音」論はハスのイメージと菊子の妊娠との関連を指摘したと説いている。しかし、氏は川端が当時の新聞記事を引用したことを指摘したが、当時の新聞記事を徹底的に調査していないようであるから、本当の記事と作った記事との微妙な差を察していないようである。特に発見場所が書き替えられたことに気がついておらず、全然指摘していない。勿論川端と「満洲」との関連も指摘していない。ハスという植物の意味象徴とそれが川端へ与えた影響が指摘されていない。それでハスの芽がでることと二人の女性の妊娠したこととの関連に考えが及ばなかった。特にテキストの2回目の記事の出る時期と二人の女性の妊娠時期と、ぴったり合っている、そのタイミングの微妙さに気が付いていないようである。だから、川端がなぜ2回もハスの新聞記事を引用したのか、あるいは作ったのか、その奥深い意図に当然気がつかない。1回目の記事と2回目の記事との間にその相違点と飛躍（内容の内在的な飛躍）が指摘されていない。

「2」の考察によって、川端と「満洲」とのかかわりも分かり、「3」の考察によって、川端はハスという植物の出典とそのイメージが川端へ与えた影響が分かった。漢文学、仏教文化から生じたハスのイメージを受容した川端はさらに戦時中、「満洲」との特別なかかわりを持っていたので、「山の音」の中に新しいハスのイメージを作っていると考えられよう。つまり、わざと「満洲」の泥炭層から生じたハスのイメージを作ったに違いない。だから、「山の音」に2回も出たハスの記事は全くの偶然ではなく、さらに発見した場所 千葉検見川が福井を「満洲」との書き換えも絶対偶然ではないと思う。意味深く意図的に書き換えられたことが明らかにされた。

しかし、「1」の表2で示したように、1回目に作った記事は本当の記事とほぼ一致しているが、表3で示したように、2回目に作った記事は本当の記事との相違点が多い。それはなぜだろう。ここでは川端が「満洲」とハスとの受容、その関連関係を参照しながら、それを解明していきたいと思う。

修一に女がいる間は自分の清潔を保つために、菊子は人工中絶をした。信吾から見れば1回目の妊娠中絶は、むしろ修一によって菊子の魂が殺されるようなことである。菊子自身のほうから言うと「清らかさ」を保とうとする行為だと理解してもいいであろう。そこで1回目の新聞記事が出た。ハスの実が弥生式古代遺跡の中から発見され、3粒の実はそれぞれ千葉農事試験場、千葉公園の池、千葉市の造り酒屋の家に植えられた。つまり、発見された場所も、栽培された場所も全部日本国内である。徳利型とか、湯飲型とか、お鉢型とか、全部日本的という意味が捉られても差し支えないであろう。だから、1回目のハスはまったく日本的で、純粋なものだと理解したらいいであろう。菊子が妊娠を中絶した後、ハスの話を持ち込んだ作者にはそういう清らかな「泥中蓮華」は菊子の存在を象徴している意図があるのではないか。「泥中蓮華」

の「泥中」というのは、「戦火」を浴びた後、水火の苦しみの中の病的、墮落的な戦後の日本社会、また「戦火」の洗礼を受けて、経済的にも、精神的にも麻痺し頹廃するという戦地の癖がついて帰って来た修一を象徴しているのではないかと思われる。戦後の社会に生き、又修一と一緒に生活している菊子は、まるで「泥中」の中に生きていようである。菊子はまさに1回目の新聞記事に出た弥生時代の純潔なハスのイメージではないかと思う。もちろんハスという植物のイメージを借りて、生命の尊さを強調する作者の意図もあるに違いない。ここは確かに越智治雄が指摘したように蓮から菊子の人工流産に話題を移して行く信吾の心理の流れは、一見唐突にみえる。しかしそれゆえにかえて、蓮に触発された信吾の想念が、菊子の内部に宿っていた一つの生命にかけている思いに接続していたことが明朗であるだろう。

しかし、ストーリーがまた発展していく。菊子が人工中絶して、まもなく修一との夫婦関係は深くすすんだ。二人の夫婦のなかは温くなごんだ。それは「菊子のあわれさか愚かさか」、「それらのことを菊子は自覚しているのだろうか、あるいはそれとさとらないで菊子は造化の妙、生命の波に、素直に従っているのかもしれない」と信吾は推測している。

暫くの後、菊子がまた妊娠しているのではないかと房子は保子に言っている。と同時に、戦争未亡人である絹子（修一の愛人である）も確かに妊娠している。私生児としても（修一は絹子の孕んだ子を産むことが許せないから）生もうと信吾の前で強く決心を示した。ちょうどその時、2回目の新聞記事が出された。そのタイミングが余りにも象徴的で、微妙である。1回目の弥生時代のハスについての新聞記事は確かに珍しかったが、単純な話であった。つまり、それは川端が単純なハスのイメージを借りて、純粋な菊子のイメージを作る意図にあったわけである。しかし、2回目の新聞記事は複雑になってきた。そこに新しい発展があった。先ずハスの実の発見人は日本人の博士であり、発見された場所は「満洲」であったが、正確な年代を知るためにさらにアメリカへ持って行かれた。開花したのはワシントンの公園であった。本当の記事との相違点が多いことに注目した。特に、発見場所はわざと新聞記事と違った「満洲」と書き換えてしまった。戦争の時は日本人が「満洲」を作った。「満洲」は日本人にとっては、戦う場であったし、自分の作った国でもあった。特に戦時中、二度「満洲」へ行って、またそこへ愛着を示したことのある川端にとっては、「満洲」は複雑な存在であったに違いない。「満洲」から発見されたハスのイメージと日本の本土で発見したハスのイメージとは完全違っている。「満洲」 日本 アメリカ、これは図式的に時代を象徴しているのではないかと思われる。ハスの種が「満洲」から、日本に、さらにアメリカへ、長い年月を経て、長い道のりを超え、やっとつぼみを二つつけ、薄紅の花を開いた。そういうハスのイメージは苦しみの中、悟ようになり、妊娠している二人の女性を象徴しているのではないか。「煩惱愛欲の中に正覚を示す」、「火中」に「生ずる蓮華」のイメージではないか。二人の女性は子をはらむのは自身が生きることだけではなく、また再生することを証明しようとしている。敗戦という現実の崩壊に川端の蘇生感が、信吾の再生や永生の願いの背後にあることは疑いない。また

「やっかつばみを二つつけて、薄紅の花を開いた」のは「文正ざうし」に文正が蓮華の夢により授かった二人の姫君のことを想起させる。川端はハスの新聞記事を作ることによって、二人の女性が子をはらませ、新しい生命、新しい美をつくらうではいかか。ずばり2回目の記事の最後に書いているように「五万年も経って起き出して来ると、自分の難儀も社会の難儀もすっかり解決済みで、世界は楽園になっているかもしれない。」「世界も楽園になる」というのは川端の最終の願いであろう。

戦後最初の長編としての『山の音』に作ったハスのイメージはかなり重要な意味を持っている。特に1回目の新聞記事から2回目の新聞記事への飛躍はまさに「泥中蓮華」イメージから「火中蓮華」イメージへの飛躍であるのではないかと考えられよう。そのような飛躍はいままで川端世界に無かったものだと思う。「山の音」の中に出た飛躍は川端文学の飛躍だと言えるであろう。

「火中蓮華」は愛の煩悩を美に昇華する。生に昇華する。この作品で川端は「火中」に「蓮華」を咲かせることは新しい美的存在菊子の悟りだけではなく、自分の作家としての使命である自覚でもあろう。その「さとり」によって、生の「寂しさ」から脱却し、戦争に対する「諦め」の背後にある「再生」の欲望こそ、作中人物信吾や菊子と絹子、また作者川端自身が救われる道でもあると言えよう。「火中」は煩悩のことで、釈迦は煩悩を脱し、「仏」となったが、絹子や菊子は「はす女神」（母神）になって「さとり」の境地を得ようとしている。このように川端は「火中蓮華」によって、戦後作品の特徴がはっきり打ち出され、「山の音」はまさに川端の戦後の「火中蓮華」であると言えよう。

おわりに

戦争中、川端がほとんど何も書いていなかったことは周知の通りである。戦争末期、わずかに「故園」、「夕日」を書きつぎ、掌編いくつかと短編一つといった創作ぶりであったが、敗戦の年、年末まで、一つの作品もない。

一生の中で、2回の「満洲」旅行は川端の心への波動は大きかったようである。多産の作家である彼もしばらくになにも書けなくなっていた。戦後、すっかり悩んだあげく、川端が作ったのは「山の音」である。そういう意味で、「山の音」はある程度作者の戦争への反省、咀嚼が作品に書かれていたと思われる。当時「紙面には書かなかった」もの、「内心には書きつけてみた」ものはむしろ「山の音」に書かれていると推測できよう。

「山の音」は尾形信吾の数えて62歳から63歳までの1年余りという時間的な枠が与えられた。作品の発表は昭和24年から5年かけてという極めて明瞭な時間の設定が行われた。さらに、ハスの花を育てて、開花させた博士の年まで、「六十九歳」とわざと明記した。この時間の設定は戦後日本社会の投影と作者自身が信吾とハス博士への投影がはっきり分かる。

「山の音」におけるハスの新聞記事について（管）

「理想の国の人」　美しい姉　紅葉のイメージは敗戦によって、そのまま滅んで、終焉となってしまうのではなく、滅びぬ美の上に「新しい美態」を発見する。新しい美意識の誕生は信吾の救いであり、川端の再生でもあろう。紅葉のイメージからハスのイメージへの飛躍には川端の内部の微妙な変化が潜んでいる。さらに、「泥中の蓮華」から「火中の蓮華」への再飛躍は川端が敗戦の廃墟に立って、戦争についての思索の結果であろう。戦争によって、断たれた生命と千年乃至五万年を生きたハスとを結んでいけば、信吾に与えた戦争の傷跡は深いにもかかわらず、彼が永続する生命への期待を潜めて、菊子に託していたことが明らかになってくる。戦争を潜り抜けなければ書かれなかった作品だと言えよう。「山の音」は川端が戦後新たに存在し直し、廃墟からの再出発と言えよう。そこで、川端の独自の美的理念も深化され、高められた。

ただし、ハスの芽の出たことと二人の女性の妊娠したこととの関連をもっと掘り下げる必要があるが、紙幅の関係で、今後の課題として検討していきたいと思う。

<注>

1) 「山の音」発表順序

- 「山の音」(『改造文芸』昭和24・9)
 - 「蝉の羽」(『群像』昭和24・10 原題「日まわり」)
 - 「雲の炎」(『新潮』昭和24・10)
 - 「栗の実」(『世界春秋』昭和24・12)
 - 「栗の実」(続編)(『世界春秋』昭和25・1 原題「女の家」)
 - 「島の夢」(『改造』昭和25・4)
 - 「冬の桜」(『新潮』昭和25・5)
 - 「朝の水」(『文学界』昭和26・10)
 - 「夜の声」(『群像』昭和27・3)
 - 「春の鐘」(『別冊文芸春秋』昭和27・6)
 - 「鳥の家」(『新潮』昭和27・10)
 - 「都の苑」(『新潮』昭和28・1)
 - 「傷の後」(『別冊文芸春秋』昭和28・1)
 - 「雨の中」(『改造』昭和28・4)
 - 「蚊の群」(『別冊文芸春秋』昭和28・4 原題「蚊の夢」)
 - 「蛇の卵」(『別冊文芸春秋』昭和28・10)
 - 「秋の魚」(『オール読物』昭和29・4 原題「鳩の音」)
- (羽鳥徹哉・原善『川端康成 全作品研究辞典』 勉誠出版 平成10・6)

2) 山本健吉「『山の音』紅葉見の巻」(『現代文学全集』39巻 筑摩書房 昭和30年11月)は「盆栽のみじが、この作品の一つの象徴となり、主調低音をなしている。それは信吾の、保子の姉と嫁の菊子とに対する気持をつなぐかけ橋でもある。『源氏物語』で、光源氏の藤壺の后と紫の上とに対する気持をつなぐ紫草のようなほかの役割を演じていると言ってもいいだろう」と論じている。実際に小説の最後のくだりに紅葉見に出かける場面がないから「『山の音』には、今のところまだ書かれざる『紅葉見』の巻がある」という「未完説」を提唱した。

3) 谷国幸代「川端康成と琳派」(『国語と国文学』第73巻第12号 東京大学国語国文学会 平成8・12)は「元来『光琳菊』の言葉があるほど、琳派と『菊』の結びつきは深い。この琳派の『菊』とのめぐりあいが契機となり、菊子像を含めた『山の音』の構想が発酵し始めたのではないか」という結論を出した。

4) 越智治雄「『山の音』その一面」(『国文学』昭和45年1月臨時増刊号 学燈社 昭和45年1月)。

5) 川端康成「山の音」(『川端康成全集』第3巻「鳥の家」 新潮社 昭和55年2月)430頁。

6) 川端前掲「蛇の卵」509頁。

- 7) 川端康成「満洲の本」(『文学界』昭和17年3月号 第9巻第3号 に発表された。「文章」<昭和17・4・17日 東峰書房刊>に、初めて収められた。全集32巻)609頁。
- 8) 同上 609-613頁。
- 9) 筒井俊一「来満作家の印象」(『満蒙評論』 満蒙評論社 昭和16年7月)。
- 10) 川端康成「満洲国の文学」(『芸文』昭和19年7月号 巻号未詳 満洲文芸春秋社刊 に発表された。全集32巻、624頁)。
- 11) 同上 616-625頁
- 12) 川端康成「新京から北京へ」(『少女の友』昭和16年8月号 第34巻第6号 の巻頭に、安田勝彦の撮影した写真とともに発表された。全集27巻、305頁)。
- 13) 川端康成「哈爾濱記」(『大陸』昭和16年12号 第4巻第12号 に「満洲の旅より」と題して、発表された。全集27巻、305頁)。
- 14) 川端前掲「満洲の文学」617頁。
- 15) 川端康成「月下美人」(『朝日新聞PR版』昭和38・8・11、全集1巻、515-519頁)。
- 16) 川端康成「生命の樹」(『婦人文庫』昭和21・7、全集7巻、333-363頁)。
- 17) 羽鳥徹哉・原善『川端康成 全作品研究辞典』(勉誠出版 平成10・6)
- 18) 相賀徹夫編集『日本大百科全書 第18巻』(小学館 1987・11)
- 19) 『世界大百科事典』第22巻 (平凡社 1988・4)
- 20) 『詩経』『中国古典文学全集 詩経・楚辞』第1巻 (訳者 目加田誠)(平凡社 昭和35・1)蓮華に出る段は「鄭風山有扶蘇」に見る：
山有扶蘇 山に茂る木
隰有荷華 沢には荷華
- 21) (清)陳夢雷(編)『古今圖書集成』(鼎文書局)
- 22) 同上
- 23) 同上
- 24) 倉野憲司『古事記全注釈』第7巻・下巻編(三省堂 昭和55・12)
雄略天皇
久佐迦延能、伊理延能波知須、波那婆知須
日下江の、入江の蓮、花蓮。
- 25) 白居易「長恨歌」(西村富美子『鑑賞 中国古典 第18巻 白楽天』角川書店 1988・10)。
- 26) 川端康成「叙情歌」(『中央公論』昭和11・10、全集3巻、471-499頁)。
- 27) 同上 481頁。
- 28) 同上 478頁。